

<b>発表タイトル</b>	フィリピン近代美術における聖母子像の現地化 ーガロ・B・オカンポ作《褐色の聖母》(1938年)
<b>発表者所属名</b>	文化科学研究科 比較文化学専攻
<b>発表者氏名</b>	古沢ゆりあ
<p>本研究は、フィリピンにおける聖母子像の現地化（現地の伝統衣装をまとい現地の女性の容貌をした聖母子像）を対象とする。近代美術における聖母子像の変容を、文化表象やアイデンティティの観点から、美術史的・文化人類学的手法によって明らかにする。</p> <p>本発表は、フィリピン近代美術の代表的画家ガロ・B・オカンポ（Galo B. Ocampo 1913～1985）によって1938年に描かれた油彩画作品《褐色の聖母》（<i>Brown Madonna</i>）をとりあげ、フィリピンにおける近代美術運動と、その中で画家が聖母子像という西洋美術由来の主題を再解釈して作品化し、現地の美術界に一定の影響を与えたことを考察する。</p> <p>この絵画は、コモンウェルス時代（アメリカの支配下のフィリピンで独立準備政府が樹立された時代）に描かれ、文化的アイデンティティの形成にともなう自己（自文化）像の表現がみてとれる。フィリピンの美術史家は、これを「宗教図像の脱植民地化の試み」（Guillermo 1994）と評している。</p> <p>本発表では、この作品をめぐって次のふたつの新しい観点を提示したい。それは、作品の評価と受容の初期の過程には外部からのまなざしの介入が見られることと、制作後一～二年のうちに作品に変更が加えられた可能性である。</p> <p>《褐色の聖母》は、1938年4月～5月にルソン島北部の都市バギオでの展覧会で最初に展示された。聖母子をフィリピン人の姿でフィリピンの風景の中に描くという非正統的な方法で描いているため当初は批判を受け論争が起きた。しかし、ひとりの宣教師が称賛したことにより評価は好転し、作品は有名になっていった。さらにその後数年間のうちに海外でも数回にわたって展示されるなどしたことにより、オカンポの代表作でありフィリピン美術史の重要作品とみなされるようになったと考えられる。</p> <p>1938年から1940年までの出版物に現れる本作品の写真と現存作品とでは、背景を中心とした細部が異なる。そのことについてこれまでの研究で言及はないが、両者の画像の比較と現存作品の表面の観察から、作品が制作後一～二年のうちに、おそらくは加筆がなされることによって変更が加えられた可能性が考えられる。</p>	